〔論　文〕

ヨナ書二章に見る文学構造とその特徴について

油井　義昭

Ⅰ　序

ヨナ書は十二小預言書の第五番目の書であり、最も異常な預言的物語という点で他の小預言書と異なっている。神の使信を伝えにニネベに行くことを拒否してタルシシュに向かう預言者の旅は異常現象に満ちている。暴風、大きな魚（その中でヨナは歌を作る）、陸に戻されてからニネベに行き宣教したところ、ニネベの人たちの大量回心が起こったことなどである。この小論において、ヨナ書二章の祈りの詩はヨナ自身のものかどうか、又、ヨナ書二章が、そして特に祈りの詩がどのような文学的構造になっていて、どのような特徴をそなえているか、そしてどのような使信・神学的課題を与えているかを見ることにしたい。

II　本文の文脈上の位置―詩文型と散文型との関係をめぐるヨナ書の統一性の問題

ヘブル語原典によれば、ヨナ書二章は邦訳の一章十七節から始まり、したがって二章十節は原典では二章十一節となる。新共同訳はヘブル語聖書の通りである。邦訳二章二節から九節の詩の部分はいくつかの困難な問題を提起する。即ち詩文型と散文型との関係をめぐるヨナ書の統一性の問題である。学者たちは次のような点を指摘する。(1)この詩の内容は個人の詩であるが、詩文の続きから考えると当然魚の腹に呑み込まれたヨナの、救いを求めての悔い改めの詩であるべきである。(2)また詩の位置についても、感謝の詩ならば当然、二章十節の魚の腹からの解放の後に置かれるべきである。(3)この詩は詩篇の各所との並行が見られ、詩篇からの断片的な編集になるものであろう。(4)用語法から言っても、散文の部と詩の部の用語は著しく異なっている。こうしてこの詩は散文よりも古いものであるか新しいものであるかはともかく、著者かまたは後代の編集者によって挿入されたものと考えられている。[1] ヨナ書二章は十九世紀から二〇世紀のかなりの年までヨナ書本来のものではなくて、あとの時代に加筆されたとの見解が圧倒的である。だから、この詩を除去した方が物語の一貫性が明らかに回復されると言う人もいる。[2] はたしてこのような見解が最も受け入れやすい見解であろうか。

しかしながら散文と詩文が交ざる異なる類型を用いた文学の成立は可能ではなかろうか。言語には詩文と散文がある。海の歌（出エジプト十五章）、モーセの歌（申命記三二章）、デボラの歌（士師記五章）、ダビデの詩（サムエル記Ⅱ二二章）は散文の中にある詩である。ヤコブとモーセの遺言（創世記四九章、申命記三三章）やバラムの託宣（民数記二三章―二四章）は散文と区分してある。ヨナ書二章三〔二〕―十〔九〕節は散文から詩文へ劇的に変化している。[3]

それよりむしろヨナ書全体が詩のカテゴリーに属していると言った方がよいかもしれない。つまり、ヨナ書は詩文の作品であるだけでなく、全体が韻律的言語による作品であると言えよう。ヨナの詩（二章三〔二〕―十〔九〕節）と「散文の」物語は詩文と散文の区別という「高揚された言語」による程度の差なのである。ヨナ書は物語と叙情詩の間を動いている書であると言えよう。[4] それゆえ後の編集者の挿入の跡をここに認める必要がないのではないか。ヨナの詩の部分はヨナ書理解の本質的部分として不可欠である。

多くの学者の解釈は魚の腹に呑まれたことを、ヨナの不幸の極限と考え、イスラエルの捕囚の比喩と見たり、また魚とレビヤタンや竜（ヨブ記四一章、詩篇七四・十三―十四、イザヤ書二七・一、五一・九等）のイメージでとらえているが、[5] 魚は主が備えられたのである（一〔一・十七〕節）。魚はヨナ救出の「摂理の道具」にほかならない。海に投げ込まれ「よみの腹」に落ち込んだこと、「深淵」に投げ入れられたことが神の審きなのであって、魚は救いの恵みの手段なのである。魚の腹はしたがってヨナにとって悔い改めと感謝の場所であり、使命に向かって出発を「誓う」（二・十〔九〕節）場なのである。それゆえにこの詩はまさにこの位置にあるのが内容に最もふさわしいと言わねばならない。

Ⅲ　言語と内容についての解釈

A　一〔一・十七〕―二〔二・一〕節及び十一〔十〕節の散文の言語と内容

新しいペリコーペ（短章句）が二・一〔一・十七〕から始まり、二・十一〔十〕と共に終わる。一節―二

節の散文の内容を調べよう。

一〔一・十七〕節。וַיְמַן יְהוָה דָּג גָּדוֹל

מִנָּה は מנה のピエル形（מִנֶּה）の未完了形でワーウ継続法となっている。מִנֶּה（ピエル形）は「割り当てる」「備える」「任命する」「提供する」という意味を持つ。ダニエル書一・五、十、ヨブ記七・三では「割り当てられた」「割り当てた」「定めた」の意味で使われている。神はろば（民数記二二・二二―三五）、獅子（士師記十四章）、雌ろば（サムエル記I九章）を備えられた。מִנֶּה はそれを通して成就する媒介を必要とする行為である。神は「大きな魚」を備えるとことよりも、ヨナに教訓を与えるために適切な状況を与えたと言える。動物が物語の中で導入される時、望まれた目的を果たす[6]。大きな魚はバアル神話の海の怪獣から引き出されたという人もいるが[7]、これには説得するだけの証拠がない。

מִנָּה は二・一〔一・十七〕の他に、ヨナ書四・六（とうごま）、四・七（一匹の虫）、四・八（焼けつくような東風）に出て来て、主ないし、神が主語となっている。一章の登場人物の多くが水夫たちであったが、水夫たちと行動の場所が船の上（四―十五節）と陸（十六節）から海に変わり、今や焦点がヨナと魚に移る。神は出来事のコースを決めるお方としてとどまっておられる。

二・十一〔十〕の後で三・一―三aの命令は、一・一―三のはじめの召しをこだまして、新しいペリコーペ（短章句）を始める。新しい所（陸）で、ヨナを通して、主のもともとの意図の完成という目的をもったペリコーペである。וַיְצַו יְהוָה の וַיְצַו は צו とDとGで子音の逆転の語呂合わせとなっている。DG・GD。四・六では יָצָא と וַיַּעַל が、四・七では וַיַּעַל と וַיַּכֶּה が語呂合わせとなっているし、四・八では וַיְהִי と וַיַּכֶּה が RH・HR で子音の逆転の語呂合わせとなっている[8]。魚は海に投げ込まれたヨナを救う道具として主に備えられたものである。言葉づかいは正確である。主がコントロールしておられる。魚は単に主の言われることを行

なっているのみである。二・十一〔十〕節においてもそうである。[9]

יונה בן אמתי הנביא（ヨナ）はヤロブアム二世（紀元前七八六―七四六年）の繁栄の治世の間に生きたアモスの同時代人として事実列王記Ⅱ十四章二五節に言及されている。したがってヨナは八世紀の預言者である。שלשת ימים ושלשת לילות（三日三晩）。ヨナが魚の中にいたという主張に意義がある。これは二重の力がある。慣用法的に、これは三日間で、四十日四十夜（創世記七・四）のように時間の期間を強調しているように見える。しかし、それ以上に、生きている者の地からシェオルへの旅（あるいは逆もまた同じ）は三日間かかるという一種の民間の観念や陳腐な決まりの表現であったかもしれない。ランデスはシェオルへの旅のモチーフがこの詩の中の下界への言及の意図的な響きとして、著者ヨナの用語の選択の背後にあることを示すために、この説得力のある証拠をあげている。[10]

二〔二・一〕節。ויתפלל יונה אל יהוה אלהיו

ヨナが「彼の神、主」に祈ることができたのは、一・九でヨナが創造主であり、主権者であり神である主を告白したことと関連する。ヨナが祈りをするところでは、誰に向かって祈るかは重要である。ヨナが祈ったことに言及することは避けられないことである。さもないと三〔二〕節からの詩は突然何の導入もなく、押し入ることになるからである。しかし、かてて加えて、ヤーウェがまだヨナの神であることを知らされる。これまで起こったことのすべては、ヨナが今まで知っていたことについての確信を増すばかりである。主はご自分の願われた通りに行動されるお方である。ヨナの逃亡とそれに続いた環境はヨナの信仰と少しも矛盾しなかった。ヨナには今や少なくとも考える時間がある。船長に起こされてからの船上の出来事は狂乱であった。その結果ヨナは嵐の海に投げ込まれた。ヨナは溺れ、海の中に沈んだ。しかし何かがヨナを包んでいた。それが魚であることをヨナは感じていた。とにかく時間が経つにつれて、ヨナは死なないことが明らか

であると感じた。魚の内部から感謝の祈りをささげる力は、魚の中の状況は全くの苦痛とか恐慌ではなかったことを意味しているのではなかろうか。

מבטן דגה　中世の多くの注釈者は、もしヨナが魚の中で祈りのうちに三日を過ごしたとするなら、מבטן דגה（魚の腹の中から）よりむしろ、בבטן דגה（魚の腹の中で）と読むべきであったと論じた。それで彼らはこの詩を感謝の賛美として読み、三〔二〕b―十〔九〕節の動詞を過去の出来事を表わしているものとして取り扱った。イブン・エズラは、強力な合理主義者であるが、この方法を批判した。イブン・エズラは、この詩の中で、祈っている時ヨナが絶望的な状態にいたことを示すために、この詩の中から証拠を上げて読者に「預言的完了」はしばしば現在形を反映することを思い起こさせたのである。[11] 事実、ヨナの本文は年代においての、このごまかし小細工を支持しない。なぜなら一〔一・十七〕節のבמעי דגה（魚の腹の中で）と二〔一〕節のמבטן דגה（魚の腹から）の繰り返しは、明らかにヨナの魚の中での滞在の時とヨナのこの詩の作詩とに同時性を持たせる工夫としての役目を果たしているからである。[12]

魚について一〔一・十七〕節には דג（男性形）であるが、二〔一〕節では דגה（女性形）が使われている。一節の男性形（ダーグ）と異なって、なぜ女性形（ダーガー）の魚にしたのか、説明されていない。大きな魚は神の救いの手段であることはテキストから明らかである。ちょうど烏（からす）が神によって救いの手段をエリヤに運ぶために送られたように（列王記I十七章）、大きな魚はヨナを溺死から救い上げるために送られた。用いられている語がこのことを完全に確かにする。それは、多くの名前を持っている（ラハブ、レビヤタン等）深淵の怪獣ではなく、親しいありふれた魚である。実際に女性形が一度用いられている（二〔一〕節）。それはたぶん筆者の意図を示しているように思われる。ラビたちはこの微妙な差異を取りあげ、この物語にある細目を付加した。貧しいヨナにいくらかの光明を与えるために魚の腹に真珠があった。魚の目は窓のようで、

それを通して「山々の根元」（七〔六〕節）を見ることができた。[13] 一〔一・十七〕節のヨナを救助する דג と十一〔十〕節のヨナを吐き出す דג は男性形で、ヨナを包む魚を דג としたのは経験者である著者ヨナの気持ちをよく伝えているように見える。ヨナを呑み込んだ「大きな魚」は、ここでは、まさに抱き、養い、許す「グレート・マザー」的なものとして、心の傷をいやし、再生のための活力を与える媒介となっているように思われる。「魚（女性形）の腹の中から」とは、逆境の現実の中にある主の保護を感じとったところからの祈りと言えるように思われる。

十一〔十〕節　詩文が終わり再び散文に帰る。וַיֹּאמֶר יְהוָה לַדָּג וַיָּקִא אֶת־יוֹנָה אֶל־הַיַּבָּשָׁה（主は魚に命じヨナを陸地に吐き出させた）。魚はこの度は男性形（דג）である。「命じる」は「言う」（אמר）であるが、天地創造における「神は仰せられた」と同じである。主は魚にヨナを呑み込ませることを命ずると共に、吐き出すことを命ずる。魚に対する主の支配と魚の道具性がよく表わされている。選んだ預言者ヨナを必要とし、与えた使命に徹底的に立たしめようとする主の意志（それはいつくしみときびしさの神の意志、ローマ十一・二二）を物語るものである。

B　詩の文学的構造と真正性の問題

三〔二〕節b―十〔九〕節の中で言語と語彙が散文から詩に変わる。三〔二〕節b―十〔九〕節は前後が散文に挟まれている。ヨナの祈りの詩をサンドイッチにし、中心部を構成して、前後の散文が詩の部分をインクルジオ（散文―詩文―散文）にしている。聖書のヘブル語の散文の物語はしばしばこのように詩を編み込んでいる。五書と前預言者そして歴代誌はしばしば同じようなやり方で詩を散文の間に編み込ませている。

散文の文脈の中での時折の詩の引用は、旧約聖書物語の文体の通常の側面であることをおぼえなければならない。このことを認めなかったためにヨナ書からヨナの祈りの詩を後代の加筆だとして切り取る広範な傾向を許してしまったのである。このヨナの祈りの詩の真正性・権威性を疑う決定は、三つの根拠のうちの一つかそれ以上に基づいてなされた。その三つの根拠は次の通りである。①この詩は継続性を失うことなく本書からスッポリ切り取られてもよいという事実、②本書の残りの部分の主題と詩の主題には一致がないという仮定、③悲惨の文脈の中における感謝の詩の不適切性である。

(1)切り取ることができることは、聖書の引用章句の一節やペリコーペ（短章句）の真正性を疑う合法的な試金石になったことはない。文脈の一貫性に影響しないで一つのペリコーペを切り取ることができないことは真正性にとっての有効な議論である。しかしその反対は、つまり、ペリコーペを切り取っても文脈の一貫性に影響しないということは、真正性に反対する有効な議論ではない。除去できるすべての文学的部分の大部分は加筆ではなくて、本文に元々あるものである。可能性と蓋然性の混同が聖書の文学批評の中で加筆でありうるものは加筆でなければならないと考える傾向をもたらしたのである。ヨナの詩は加筆でありうる。しかし、ヨナの詩の加筆である可能性は、ヨナの詩の加筆である証拠とはなりえないのである。

(2)ヨナの詩の主題のヨナ書の残りの部分の主題との一致の欠如に関して二つのことが言える。第一に歴史的賛美と一つの顕著な嘆きの歌（詩一三七）を除いて、その内容が明白に特定の歴史的状況に詩を縛るものは殆んどないのである。感謝の詩は特に非特定である。詩篇の性質は適用が一般的である。第二に感謝の詩はその適用において一般的だという事実によってなされた厳格な制限の中で、ヨナの詩は、その同じ類型の感謝の詩と同じように、ヨナ書の残りの部分と主題的に大層密接に関連している。ランデスは、この詩はヨナ書全体に絶対必要で、したがって、十中八九原作であると説得的に論じた[14]。

⑶この詩自体は感謝の詩のカテゴリーの誇示すべき模範である。感謝詩はしばしば五つの部分の構造を示している。

感謝詩の構造　ヨナ書二・三〔二〕―十〔九〕節

①詩の序文　三〔二〕節

②過去の悩みの描写　四〔三〕―七〔六〕節a

③神に助けを求める訴え　八〔七〕節

④神が提供した救助への言及　七〔六〕節b

⑤賛美の誓いと／あるいはあかし　九〔八〕―十〔九〕節

B・W・アンダーソンは「この詩篇は、文脈からいえば明らかに場ちがいである。魚の腹の中から助けを求めて叫ぶなら（つまり、嘆きの歌ならば）道理にかなっているが、しかしすでに体験した解放を感謝するというのは不可解である」と言って、この感謝詩は後代の挿入だと主張する[15]。しかしながら、感謝と嘆きの経験とは表裏一体であることがしばしばではなかろうか。嘆きの状況からの脱出の経験、救い出される経験から感謝は歌となってほとばしるものではなかろうか。ヨナ書において、神が備えた魚がヨナを死から救った。ヨナは海を漂流していたら、溺死したであろう。ヨナは魚に呑み込まれて生かされた。時間の経過と共に、魚の中で、ヨナは主の自分への忠実さに関して心の変化を経験した。ヨナは自分が死ぬことを主は望んでおられると思っていた。今やヨナは自分が生きていて、息をしていることに気がついた。時間が経つにつれて自分が生かされていることを悟り始めた。この詩はこの事実に対して雄弁な証しとして機能している。したがってこの詩はこの文脈にふさわしいのである。

もし、この詩がヨナ書になかったら、何が欠けるであろうか。四つのものが失われるであろう。①神の命

令が二度目にヨナに臨んだ時、その命令に従わせた、ヨナの経験した部分的な心の変化が表現されなかったであろう。詩は九〔八〕―十〔九〕節の誓いをもカバーしているので、神の命令への服従の原因を述べている。②救助されたことについてのヨナの継続する感謝の心への注目が実質的に除去されるであろう。③魚の中でのヨナの旅のことは語られないであろう。ヨナの祈りの事実は、魚の中での彼の心と身体の状態について語っている。④本書の主要な神学的強調点が弱くなるであろう。ランデスが論ずるように、この詩は本書のメッセージの本質の一部をとらえている。つまり、主はあわれみの神であり、罰するよりも赦しを願う愛の神（ヨナ四・二参照）である。この詩を通して片意地なヨナは受けるに値しない主の救いを告白している。四章ではこの詩とは対照的にヨナはニネベの人々が受けるに値しない主の救いに我慢ならないのである。この詩は恵みを必要としている個人個人への主の配慮についての中心的陳述を提供している[16]。

C　三〔二〕―十〔九〕節の詩の私訳

三〔二〕私は苦しみのうちから主に呼ばわると、
　主は私に答えられた。
　私がよみの腹から助けを求めて叫ぶと、
　あなたは私の声を聞かれた。
四〔三〕あなたは私を深みの中に、海の真中に投げ入れられた。
　潮の流れが私を囲み、
　あなたの波と大波は皆、私の上を越えていった。

五〔四〕私は言った「私はあなたの目の前から追われました。
しかし再び私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです」と。
六〔五〕水は私をめぐってのどを絞めつけ、深淵は私を取り囲み、
海草が私の頭に絡みついた。
七〔六〕私は山々の基までくだった。地はそのかんぬきと共に永久に私の上にあった。しかし私の神、主
よ、あなたは私のいのちを穴から引き上げられた。
八〔七〕私の魂が私のうちに弱っているとき
私は主を思い起こし、
私の祈りはあなたに至り、あなたの聖なる宮に達した。
九〔八〕むなしい偶像に心を寄せる者は、その忠節を捨てる。
十〔九〕しかし私は感謝の声をあげて、
あなたに犠牲をささげ、私の誓いを果たそう。
救いは主にある。

D　詩の言語と内容

三〔二〕節　ヨナは苦しみの中で神に訴える。そして神はヨナの訴えを聞かれる。この状況にふさわしく、第一行は、一人称（私）の訴えである。第二行では、前半部が一人称による訴えであるが、後半部では神を直接に出し、「あなたは私の声を聞かれた」となる。ここでは論理的順序が逆になっている。神はヨナの訴え

に「答えられた」。それからヨナの声を「聞かれた」。普通の順序としては、神はヨナの訴えに答える前に、ヨナの声を聞くべきである。この詩の情景がある程度の型の変化を要求したのかもしれない。そしてその型の変化は語順転換によってなされた。第一行は、読者にヨナにとってすべてが順調であることを確信させているのである。第二行は、読者の目が魚と魚の腹を不必要に凝視することからそらして、読者の目をシェオル（よみ）に向けさせているのである。

三〔二〕節は詩篇十八・七〔六〕を思い起こさせる。

私は苦しみの中に主を呼び求め、
　助けを求めてわが神に叫んだ。
主はその宮で私の声を聞かれ、
　御前に助けを求めた。私の叫びは、御耳に届いた。

קָרָא について。קָרָא は神が訴えに積極的に答える時に使われ、שָׁמַע は神が同じく好意をもっておられることを暗示している。קָרָא と שָׁמַע の二つの動詞は並行行（へいこうぎょう）の中で対（つい）をなしている。著者は、完了形からワーウ継続法未完了形に変えている。重大な時にこの完了形→ワーウ継続法未完了形への変化が繰り返し出て来て、ヨナの運命の主要な変化が行動の順序の中で示されている。

三〔二〕節　私が主に呼ばれると（完了形）、主は私に答えられた（未完了形）

四〔三〕節　あなたは私を海の真中に投げ入れられた（未完了形）。潮の流れが私を囲み（未完了形）

七〔六〕節　私はくだった（完了形）……あなたはわたしのいのちを穴から引き上げられた（未完了形）

八〔七〕節　私は主を思い起こし（完了形）、私の祈りはあなたに至り（未完了形）。

שְׁאוֹל について。שְׁאוֹל（シェオル、よみ）は、旧約聖書では地の中にある暗い死者の住居であり、神

と生命から絶たれて、死者がただ影のような存在を続ける所のように考えられていた。それは、怪物のように口、あご、腹、手をもち、呑み込もうとして待ち受けている（箴言一・十二）。よみの「腹」（בטן）は魚の「腹」（בטן）と文字が異なり、「内部」を意味する。すなわちよみの最奥部である。詩篇八八・二〔一〕―十四〔十三〕はシェオルが望みを放棄したところで、希望の回復になる祈りをするのに役立っていることを例証している。[17] シェオルの腹からヨナは願う。ここにはアイロニー（皮肉）があるかもしれない。地上の最果ての地に行くことを求めて神から逃げることを求めたヨナが、正気になって、造り主に宇宙の最も低い所に届いて下さるようにお願いしているからである。שמע のピエル形の שמע（助けを求める）は、聖書の詩の中では時折 שמע（聞く）という動詞と対をなしている（詩一八・四二〔四一〕、ヨブ一九・七、ハバクク一・二）。

著者は、よみのただ中から、神に呼ばわり、神はそれにお答えになる。詩篇一八・五〔四〕―七〔六〕と深い関係がある。[18]

死の綱は私を取り巻き、滅びの川は、私を恐れさせた。
よみの綱は私を取り囲み、死のわなは私に立ち向かった。
私は苦しみの中に主を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ。
主はその宮で私の声を聞かれ、御前に助けを求めた私の叫びは、御耳に届いた。

四〔三〕節「深みの中に」（בלב ימים）と「海の真中に」（בלב ימים）は二者択一の慣用表現である。どちらの詩的言い回しも等しく有効である。両方とも原典のテキストにあり、両方ともこの詩と共に伝達されてきた。文法と韻律はどちらか一つが実際に歌われたことを要求すると言う。しかし、どちらか一方とせずに、

この両方が元のものだとすると、後者の מים רבים は משליכני に対して説明的同格と見ることもできよう。詩篇一三二・二の「それはひげに、アロンのひげに流れて」というように重複ではなく、前のことばを、後のことばが詳細に説明的な役割を果たすようなものと考えることができる。この詩の中で三・二の韻律を破るのはこの節の前半のみである。

הטלתני は הטיל のヒフィル形でワーウ継続法未完了形二人称男性単数プラス一人称単数接尾辞で「そしてあなたは私を投げ入れられた」である。משליכני は神が奇しいわざをする所（詩一〇七・二四「彼らは主のみわざを見、深い海でその奇しいわざを見た」）である。海の深みにイスラエルの敵が投げ込まれる（ネヘミヤ九・十一、出エジプト十五・五）。罪人たち（ヨナ二・四〔三〕）、そして罪（ミカ七・十九）を海の深みに投げ込まれる。神は罪人を暗い所、深い淵におくことができる（詩八八・七〔六〕）。神は又、罪人をそこから連れ出すことができる（詩六八・二三〔二二〕）。「わたしは海の底から連れ帰る」。これらを観察してみると、ヨナの苦しみは水夫たちの行動の結果ではなく、また呑み込むヤム（海の神）、カナン万神の力強い神によって引き起こされたのではなく、むしろその悩みは、明らかに神から来ることを示唆する。散文の部分での הטיל（投げ込む）でなく（ヨナ一・十二、十五）、הטיל のヒフィル形動詞の使用は注目すべきである。この詩は明らかに他のところで使用した語彙の拡大だけでなく、それ自体の内的一貫性と文体を持っている。語彙の選択の観点から、この詩は逐語的に本書の残りの部分と相互依存するというよりもむしろ、主題的に相互関係があると言える。[19]

מים は「海」であるが、カナンの混沌の神ヤムを暗示しているのだろうか。נהר「潮の流れ」は、原始の海と関係する地下の大水のことで、川のことではない（詩二四・二、四六・五、九三・三、八九・二六）。ウガリトの用法ではエル（神）の住居である二つの大洋（テホーム、ヨナ二・六〔五〕にも出て来る）また海と

並行して用いられている。[20] 著者は六〔五〕節では「深淵」（תְּהוֹם）を同じ意味で用いている（創一・二）。それでジェームス・スマートは著者は地中海のような海のことではなく、怪物的深み、古代の伝説の中で、すべてを呑み込む竜ティアマトと考えられるものを考えているのだと言う。そして、それは、人間の魂を脅かす最も極端な苦しみの象徴になったと言う。[21]

六〔五〕節にも מַיִם（水）と תְּהוֹם（深淵）の対の語が出て来る。また יְסוּרוּנִי の繰り返しを見る。יְסוּרוּנִי は יָסוּרוּ のポエル形未完了形三人称男性単数プラス人称接尾辞一人称単数である。[22] 聖書の証拠はこのポエル形は脅迫的行為よりもむしろ保護的行為を伝えることを示している。神は、イスラエルが荒野で目的もなく、放浪している時、彼らをいだき、世話をされる（申命記三二・十）。詩篇三二・十では「主に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む」とある。ヨナは溺れても、神はヨナから死を撃退される。この詩人は特に慣用的な比喻的表現の使い方が巧みである。

גַּלֶּיךָ וְדַרְבֹּתֶיךָ עָלַי עָבָרוּ（あなたの波と大波は皆、私の上を越えていった）。これは詩篇四二・八〔七〕を想起させる。「波」（גַּלֶּיךָ）は「破るもの」の意味である。「大波」（דַּרְבֹּתֶיךָ）は「ころがる」（דָּרַךְ）の派生語である。ヨナが海中で翻弄される有様を表わしている。この句は詩篇四二・八〔七〕の後半と全く同じである。しかしヨナの詩は、旧約の中でひとり、深い水の比喻的表現を一貫して、支配的に使っている。

五〔四〕節　詩人の困難な状況が心理的苦悩によって描写されている。五〔四〕節の文頭には「私」（אֲנִי）が来て、強調されている。「言った」（אָמַרְתִּי）は「思った」（新共同訳）とも訳されうる。[23] しかし「言った」の方が罪の告白と信仰の告白ということを強調するのではなかろうか。

אַךְ（接続詞プラス第一人称単数代名詞）は十〔九〕節にも出て来る。十〔九〕節では、詩人の誓いと神へ

の誓約を告げる句を導入している。この代名詞の二つの誓言は二組みの感性と知覚・理解をはさむ。一つは絶望そして救い、二つ目は、感謝そして光明を投げかける。また五〔四〕節では、自分の苦境を静かに考えているが、十〔九〕節での神の干渉の故に大声の感謝で終わるという雰囲気と対照的である。

「עוד אביט היכל」（あなたの目の前から）という句と神の宮から遠く離れているという概念（「どうして再びあなたの聖なる宮を見ることができましょうか」）は、本質的、文字通りというよりもむしろ隠喩的である。つまり、この二つの表現は死の別離を含蓄している。

אך について。聖書本文中の אך（しかし、確かに、しかしながら）よりビブリア・ヘブライカ・シュツットガルテンシアの批判的脚注では אי（どうして）が提案されている。テオドーション訳ギリシャ語聖書は πῶς（どうして）の読みを採用している。テオドーションの訳が אי とする唯一の証拠であるが、この節の並行法は元の אי の回復を推しているように見える。新共同訳は校訂・修正した אי（どうして）を採用して「どうして生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。」と訳している。しかし、詩人は、感謝の表現のための適切な順序について悩むのに、そんなに論理的である必要はないのである。אי の方が詩人が直面している状況と全く一致している感情的内容を含んでいるように見える。又、ヨナは神の宮への再訪の願いを宣言しているのではなく、深淵の中での殆んど絶望的な状況の中で、祈りの中で主に立ち返る決意をしているのである。

それで新英訳聖書（NEB）は「あなたの聖なる宮を再び見ることは決してありません」と否定的断定に訳しているが、校訂・修正しない本来の文脈から言えば新改訳二版の訳がふさわしいと思われる。「しかし、もう一度、私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです。」新改訳第一版（一九七四年）は新共同訳と殆んど同じ訳をし、אי（どうして）をとり、「どうして、私はあなたの聖なる宮を再び見ることができましょう。」と

訳した。

הִבִּיט は נָבַט のヒフィル形未完了形で、これは次に続く動詞によって表わされる行為に継続性を与える。הֵיכַל（בּוּט のヒフィル形、不定法連語形）は、神を見つめようという人間（出エジプト三・六）、神の「姿」（民十二・八）を「仰ぎ見る」ことに言及している。

הֵיכַל קָדְשֶׁךָ（聖なる宮）が地上にある時は、神の聖なる所はエルサレム（詩七九・一）であるが、天にも見い出すことができる（詩十一・四、ミカ一・二、おそらくハバクク二・二〇）。したがって、ヨナがその運命を嘆く時、詩人は必ずしもエルサレムの神殿を考えていないのかもしれない。

六〔五〕節　六〔五〕節で詩人はもう一度自分の苦しみを表現する方へと変わっている。六〔五〕節は四〔三〕節に匹敵する。詩人の状態の漸進的な悪化を詳述する四〔三〕節と調和する。

四(三)a　あなたは私を深みの中に、海の　　六(五)a　水は私ののどを絞めつけ
　　真中に投げ入れられた
四(三)b　潮の流れが私を囲み　　六(五)b　深淵は私を取り囲み
四(三)c　あなたの波と大波は皆私の上を　　六(五)c　海草が私の頭に絡みついた
　　越えていった

この並行は四〔三〕節と六〔五〕の第二詩行によって強められる。そこでは同じ動詞の形 עָבַר を共有し、ヘブル語では通常対になっている נָהָר と מַיִם を共有している。四〔三〕節では、大きな海の波を特徴としているが、六〔五〕節では水没したヨナ、絡みつく海草の下で息苦しくなっているヨナに焦点を当てている。六〔五〕節にはもう一度低い悲しみの調子がある。ヨナは七〔六〕節のはじめに至るまで下り続ける

のである。[24]

נֶפֶשׁ は元来「喉」（イザヤ五・十四、詩六九・二〔一〕）であるので、「喉をしめつけ」と生命の最大の危機に至る。רֹאשׁ（海草）は死の綱（詩十八・四、五）とも言える。רֹאשִׁי נֶפֶשׁ（私の頭に絡みついた）はヨナが深く海中に沈んだ様子が描かれている。またここにはヨナが経験した危険の高まりに匹敵する喉から頭への進展がある。תְּהוֹם（テホーム）は聖書では原始の海の詩的用語である。מַיִם は普通 מַיִם（マイム）、מַיִם（ヤーム）と対をなしている。

רֹאשִׁי נֶפֶשׁ רֹאשׁ（私の頭に絡みついた）は聖書の中では容易に類似のものがない象徴である。נֶפֶשׁ という動詞は頭飾りを作るために布をきつくするという動作を表わす。しばしば נֶפֶשׁ は人間の身体に医療的な湿布を当てたり、傷をしばるということについて語る。そして時々（例えばヨブ四〇・十三）は暗黒において高ぶる者の顔をおおうこと、つまり、死に言及する。この動詞の両義の適用は興味をそそる。なぜなら、それは、ヨナの刑罰をまた、潜在的に贖罪的なものと考えることを可能にするからである。

この六〔五〕節のヨナの詩の中に、出エジプト十五・四―五の「海の歌」にある象徴と順序が逆になっていることを見い出す。「海の歌」では מַיִם／רֹאשׁ-מַיִם → תְּהוֹמוֹת → בְּלֶב יַמִּים と動く。ヨナの歌では בְּלֶב יַמִּים（四〔三〕節）→ תְּהוֹמוֹת → רֹאשׁ と動いている。[25]

七〔六〕節　七〔六〕節の最初の二詩行はヨナの苦しみの描写を締め括る。ヨナは הָרֵי הָרִים（山々の基まで）くだった。ヨナは自分が死んだと思った。この詩は同じ仮定の上に作られている。「山々の基」（הָרֵי הָרִים）と「地のかんぬき」（בְּרִיחֶיהָ）は死に関する古代オリエントと旧約の象徴表現である。マタイ十六・十八の「ハデスの門」（πύλαι ἅδου）は旧約聖書の陰喩を借りている。בַּעֲדָי（基に）は六〔五〕節の בַּעֲדָי

（私の頭に）の反対語である故に詩人が選んだことも可能である。これは死線を彷徨したヨナの経験の象徴的表現と見てよい。יָרַד（くだる）とעָלָה（のぼる）は大きな対照である。ヘブル語のיָרַדの意味の一つは「地の底」（地下）である（イザヤ二六・一九、エレミヤ十七・十二―十三、詩七一・二〇）。לְעֹלָם（基に）について、おそらくלְעֹלָם（果てまで）と読め、また、הָרִים（山々）のあとに置け、というマソラ本文の校訂は魅力的ではない。

בְּרִיחֶיהָ בַּעֲדִי לְעוֹלָם　新共同訳は新改訳の「かんぬきがいつまでも私の上にありました」の代わりに「地はわたしの上に永久に扉を閉ざす」と意訳している。

וְאַתָּה הֶעֱלִיתָ מִשַּׁחַת חַיָּתִי יְהוָה אֱלֹהָי　（しかし私の神、主よ、あなたは私のいのちを穴から引き上げられた）。ヨナの救助はきわどい時に来る。הֶעֱלִיתָ はהֶעֱלָה のヒフィル形未完了形二人称男性単数で「引き上げる」の意である。שַׁחַת（穴）は旧約では墓とか死者の領域を意味している。この詩の言葉は比喩的に死自体からの救いを描写する。ヨナは単に危機から助命されただけではない。ヨナは実際に墓から運び去られたのである。「私の神、主よ」という直接の呼びかけは（詩七・二〔一〕、四〔三〕、十三・四〔三〕、十八・二九〔二八〕）ヨナ二・二〔一〕節の魚の腹の中にいる時のヨナの祈りの対象者であるאֱלֹהָי יְהוָה（彼の神、主）と結びつける工夫がなされている。それからヨナは主への専心の献身を示し、他の神々に向かっていないことを強調するのである。[26]

八〔七〕節　八〔七〕節でヨナは、彼の嘆きを更新しているのではなくて、苦しみの間に口びるが神への祈りを発するや否やいかに救助がもたらされたかを思い出している。八〔七〕節は五〔四〕節と七〔六〕節で経験した苦悩の全てを反映している。ヨナはことばを発する二つの動詞（五〔四〕節のגֹרַשְׁתִּי〔私は言っ

た〕と八〔七〕節の אֲנִי אָמַרְתִּי〔私は思い起こす〕）と אֶל־הֵיכַל קָדְשֶׁךָ（あなたの聖なる宮に）の繰り返し（五〔四〕節と八〔七〕節）の中に、自分の下降と上昇をはさんでいる。

נִבְהֲלָה נַפְשִׁי בִּי（私の魂が私のうちに弱っているとき）。נִבְהֲלָה は בָּהַל のヒツパエル形不定形連語形で「弱る」という意味である。זָכַרְתִּי יְהוָה（主を思い起こす）。ひとたびヨナは自分がいかに絶望的であるかを悟ると、神に向かった。「主を思い起こす」ことは、単に過去のことを客観的に想起するのではなく、神が遠いと思われていた時に、神の御名を呼び、神の前で生きようとすることである。

וַתָּבוֹא אֵלֶיךָ תְּפִלָּתִי אֶל־הֵיכַל קָדְשֶׁךָ（私の祈りはあなたに至り、あなたの聖なる宮に達した）。ひどい苦しみにいる嘆願者の祈りを主が聞こうとしている側面が注意を引く。אֶלֶיךָ（あなたに）と אֶל־הֵיכַל קָדְשֶׁךָ（あなたの聖なる宮に）は同義的同格表現である。聖なる宮（詩一八・七〔六〕参照）は礼拝者の主との接触の第一の場所である。

九〔八〕節　מַשְׁגִּיחִים（心を寄せる者）は שָׁגַח のピエル形分詞複数であるが、マソラ本文の批判的脚注では מַשְׁגִּיחִים（複数連語形）あるいは מַשְׁגִּיחִים（カル形分詞複数プラス冠詞、その守る者たち）が提案されている。ヨナは偶像の無用性について弾劾することによって、主の救う力（十〔九〕節b参照）をたたえる。שְׁוְא־הֶבֶל は「むなしい偶像」を直訳的には「虚無の空しさ」である。類似の意味の二つの名詞を属格で結んで、時に最上級のニュアンスを表す一つの例である。むなしい偶像に助けを求める人々は愚かである。偶像は無能を表わすばかりではない。偶像礼拝は主への信仰の欠如を示す。

חֶסֶד について二つの解釈がある。第一の解釈では契約の忠節（חֶסֶד）は契約の創始者である神（出エジプト二〇・六等）と、契約を与えられたイスラエル人の両方の相互の義務であったので、他の神々を持つこと

によって契約の第一戒を破った者は主への忠節を捨てた（חסד）とする。協会訳、ＲＳＶ、新共同訳は「主への忠節」の意味で訳している。第二の解釈は「彼らへのヘセド」と訳すべきだとする。新改訳は「自分への恵みを捨てます」と訳す。偶像を拝する者は必然的に主からのヘセドを捨てることになると解釈する。第一の例では חסד は礼拝者の忠節に言及し、第二の例では神が神に信頼を寄せる者たちに与える恵みに言及している。この二つのうち、前者の解釈の方が好ましいように思える。もし、この節が十〔九〕節と対照を作るなら、ヨナはここで偶像を礼拝する者たちは苦しみの時に、偶像が実にいかに無力であるかを発見し、その結果彼らはもはや自分たちの考えていた神々に対して忠誠や愛を示さないであろうとの意見を述べているのである。しかし、主を礼拝する者はいつも主が信頼できる、頼りになる御力であることを見つけるのである。[27]

十〔九〕節　二つの動詞 אזבחה（犠牲をささげよう）と אשלמה（果たそう）が願望形で、ヨナの約束はすぐに実現出来ないことを示唆している。しかし十〔九〕節は神がヨナの苦しみの訴えに答えられた（三〔一二〕節）ことを実現した。三〔一二〕節と十〔九〕節はその間にあるものを包んでいる。

ואני בקול תודה אזבחה אשר נדרתי אשלמה（しかし私は感謝の声をあげて、あなたに犠牲をささげよう）。十〔九〕節は ואני（しかし私は）で始まり、強いアクセントが置かれて、九〔八〕節との対照を際立たせている。תודה は「感謝」で、元来は告白、賛美のことである。礼拝儀式における行為である。したがって「犠牲」の儀式につながる。この犠牲は神の慈愛を得るためでなく、すでに示された慈愛に対する感謝の犠牲である。

אשר נדרתי אשלמה（私の誓いを果たそう）。感謝は責任を生む。そこで「私の誓いを果たす」ことが必然となる。ヨナがこの「誓い」をたてたことについてこれまでに言及がない。一章十六節の「人々」の中には当

然ヨナが含まれていない。恐らくは「主の前を離れた」（一・三、十）ことの悔い改めと、救われた感謝に基づいて、主の使命に立つことの誓いであろう。「果たす」（שלם）は全うすることで、契約維持、平和、救い、健康を意味するシャーロームと同根の動詞である。

יְשׁוּעָתָה לַיהוָה（救いは主にある）は二つの点で主をほめる。第一に、それは、主が何をして下さったかを思い起こして、救い主としての主のみわざを高める。第二に唯一の救い主としての主の立場を高める。こうしてヨナの祈りの詩は信仰告白をもって終わる。この信仰告白の応答であるかのようにようにיהוה の יהוה（主）が十一〔十〕節で行動を起こされる。その詩から散文の切り換えの文学的表現の巧みさを見ることができる。

Ⅳ　ヨナ書二章の文学形態的分析

A　韻律の区分

ヨナ書二章一〔一章十七〕節から十一〔十〕節は韻律の形で書かれている。散文・詩文・散文の順序であるが、散文にも詩の韻律がある。韻律は次のようになっている。

1〔1:17〕節
וַיְמַן יהוה דָּג גָּדוֹל לִבְלֹעַ אֶת־יוֹנָה וַיְהִי יוֹנָה בְּמֵעֵי הַדָּג שְׁלֹשֶׁת יָמִים וּשְׁלֹשֶׁת לֵילוֹת׃ （2:4）

וַיְהוָה אָמַר לַדָּג וַיָּקִא אֶת־יוֹנָה אֶל־הַיַּבָּשָׁה׃ （4:3）

בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֵת הַשָּׁמַיִם וְאֵת הָאָרֶץ׃ (2:2:2)[1]節

וְהָאָרֶץ הָיְתָה תֹהוּ וָבֹהוּ וְחֹשֶׁךְ עַל־פְּנֵי תְהוֹם וְרוּחַ אֱלֹהִים מְרַחֶפֶת עַל־פְּנֵי הַמָּיִם׃ (2:3)[2]節

וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים יְהִי אוֹר וַיְהִי אוֹר׃ (2:3)[3]節

וַיַּרְא אֱלֹהִים אֶת־הָאוֹר כִּי־טוֹב וַיַּבְדֵּל אֱלֹהִים בֵּין הָאוֹר וּבֵין הַחֹשֶׁךְ׃ (2:2:2)[4]節

וַיִּקְרָא אֱלֹהִים לָאוֹר יוֹם וְלַחֹשֶׁךְ קָרָא לָיְלָה וַיְהִי־עֶרֶב וַיְהִי־בֹקֶר יוֹם אֶחָד׃ (2:3)[5]節

וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים יְהִי רָקִיעַ בְּתוֹךְ הַמָּיִם וִיהִי מַבְדִּיל בֵּין מַיִם לָמָיִם׃ (2:3)[6]–[7]節a

וַיַּעַשׂ אֱלֹהִים אֶת הָרָקִיעַ וַיַּבְדֵּל בֵּין הַמַּיִם אֲשֶׁר מִתַּחַת לָרָקִיעַ וּבֵין הַמַּיִם אֲשֶׁר מֵעַל לָרָקִיעַ וַיְהִי כֵן׃ (2:3)[7]節b-e

וַיִּקְרָא אֱלֹהִים לָרָקִיעַ שָׁמָיִם וַיְהִי־עֶרֶב וַיְהִי־בֹקֶר יוֹם שֵׁנִי׃ (3:2)

וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים יִקָּווּ הַמַּיִם מִתַּחַת הַשָּׁמַיִם אֶל־מָקוֹם אֶחָד וְתֵרָאֶה הַיַּבָּשָׁה וַיְהִי כֵן׃ (2:3)[8]節

וַיִּקְרָא אֱלֹהִים לַיַּבָּשָׁה אֶרֶץ וּלְמִקְוֵה הַמַּיִם קָרָא יַמִּים וַיַּרְא אֱלֹהִים כִּי־טוֹב׃ (2:3)[9]節

וַתּוֹצֵא הָאָרֶץ דֶּשֶׁא עֵשֶׂב מַזְרִיעַ זֶרַע לְמִינֵהוּ וְעֵץ פְּרִי עֹשֶׂה פְרִי אֲשֶׁר זַרְעוֹ בוֹ לְמִינֵהוּ וַיַּרְא אֱלֹהִים כִּי־טוֹב׃ (2:3)[10]節

וַתְּהִי־אֶרֶץ דֶּשֶׁא עֵשֶׂב מַזְרִיעַ זֶרַע לְמִינֵהוּ וְעֵץ עֹשֶׂה פְרִי אֲשֶׁר זַרְעוֹ בוֹ לְמִינֵהוּ וַיַּרְא אֱלֹהִים כִּי־טוֹב׃ (3:3)[11]節

詩文の支配的韻律は3・2型でキーナー調で悲しみをあらわす哀歌調である。3・2型は哀歌に見い出されて以来カール・ブッデによってキーナー（qinʿah）すなわち「哀歌調」と呼ばれる（哀歌三・一）[28]。3・2型はまた喜びもあらわし、歓喜に満ちた信頼を示すのにも用いられている（詩二七・一）。詩文の中で四〔三〕節のはじめの詩行は2・2・2型で、七〔六〕節のb―cは2・3型が織り交ざり、詩的感動を微妙な内的韻律を転化させて、思想表現にふさわしい型の詩行にしていると思われる。一〔一・十七〕節の散文の4・2型、3・4型、二〔一〕節の散文の2・2・2型、十一〔十〕節の散文3・3型はそれぞれ韻律的散文と言えそうである。

この韻律の種々の変化に固定した解釈があるとは断言できないが、詩は勿論のこと、散文も詩の形をとることによって、リズムをともない、作者の気分情緒と物語のテンポの良さをよく表わしていると言えよう。著者は詩文段落においても感情的思想的起伏を文学的技法によって見事に伝えているように見える。

B　並行法

三〔二〕節から十〔九〕節には並行法がある。この詩文の箇所には三一の半詩行があり、その一つ一つは全体の中で注意深く選ばれた所に置かれている。

⑴三〔二〕節の二詩行は同義的並行法（A・B・A^1・B^1）になっている。

私は苦しみのうちから主に呼ばわると（A）
主は私に答えられた（B）
私がよみの腹から助けを求めて叫ぶと（A^1）

あなたは私の声を聞かれた（B^1）

(2) 四〔三〕節の三詩行は下降の段階的並行法（A^1・A^2・A^3）になっている。この形態は第一詩行の思想がそれ自体で完結しないで、第二詩行が第一詩行の思想を取り上げて、階段をのぼるようにして、思想を完結していく。

あなたは私を深みの中に、海の真中に投げ入れられた（A^1）
潮の流れが私を囲み（A^2）
あなたの波と大波は皆、私の上を越えていった（A^3）

(3) 五〔四〕節の二詩行は反対並行法（A・B）になっている。

私は言った「私はあなたの目の前から追われました（A）
しかし、再び私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです（B）

(4) 四〔三〕節から五〔四〕節の第一詩行までが下降の段階的並行法（A^1・A^2・A^3・A^4）をなしている。

あなたは私を深みの中に、海の真中に投げ入れられた（A^1）
潮の流れが私を囲み（A^2）
あなたの波と大波は皆、私の上を越えていった（A^3）
私は言った「私はあなたの目の前から追われました（A^4）

(5) 六〔五〕節の三詩行は交差並行法（キアスムスABA）になっている。[29]

水は私をめぐってのどを絞めつけ（A）
深淵は私を取り囲み（B）

海草が私の頭に絡みついた（A）

(6) 六〔五〕節から七〔六〕節の三詩行までは下降の段階的並行法（A^1・A^2・A^3・A^4・A^5）になっている。

水は私をめぐってのどを絞めつけ（A^1）

深淵は私を取り囲み（A^2）

海草が私の頭に絡みついた（A^3）

私は山々の基までくだった（A^4）

地はそのかんぬきと共に永久に私の上にあった（A^5）

(7) 六〔五〕―七〔六〕節cと七〔六〕節d―eとは反対並行法（A・B）になっている。前半は長いので一部だけをあげることにする。

私は山々の基までくだった（A）

しかし私の神、主よ、あなたは私のいのちを穴から引き上げられた（B）

(8) 八〔七〕節は上昇の段階的並行法（A^1・A^2・A^3）になっている。

私の魂が私のうちに弱っているとき（A^1）

私は主を思い起こし（A^2）

私の祈りはあなたに至り、あなたの聖なる宮に達した（A^3）

(9) 九〔八〕節は八〔七〕節と反対並行法（A・B）をなしている。

私は主を思い起こし、私の祈りはあなたに至り、あなたの聖なる宮に達した（A）

むなしい偶像に心を寄せる者は、その忠節を捨てる（B）

(10) 十〔九〕節は上昇の段階的並行法（A^1・A^2・A^3）となっている。

しかし私は感謝の声をあげて（A^1）
あなたに犠牲をささげ、私の誓いを果たそう（A^2）
救いは主にある（A^3）

⑾十〔九〕節は九〔八〕節と反対並行法（A・B）となっている。
むなしい偶像に心を寄せる者はその忠節を捨てる（A）
しかし私は感謝の声をあげてあなたに犠牲をささげ、私の誓いを果たそう（B）

同義的並行法、下降と上昇の段階的並行法、交差並行法、反対並行法を駆使して、作者の状態、気分情緒、信仰を見事に描写している。特に四〔三〕節と六〔五〕節―七〔六〕節、八〔七〕節aの三度にわたって下降の段階的並行法が繰り返され、五〔四〕節bと七〔六〕節第四詩行、第五詩行は上昇の段階的並行法の繰り返しである。

マゴネットはヨナの詩が同心円的構造をなしていると言う。[30]

3〔2〕a私は苦しみのうちから主に呼ばわると主は答えられた。
4〔3〕b　あなたは私を……投げ入れられた。潮の流れが私を囲み
あなたの波と大波は皆、私の上を越えていった
5〔4〕c　私は言った「私は……追われました。しかし聖なる宮を仰ぎ見たいのです」
6〔5〕d　水は私をめぐってのどを絞めつけ、深淵は……、海草が……
7〔6〕e　私は山々の基までくだった。地は……上にあった
e^1　しかし私の神、主よ、あなたは私のいのちを穴から引き上げ……
8〔7〕d^1　私の魂が私のうちに弱っている時、私は主を思い起こし

c[1]　私の祈りはあなたに至り、あなたの聖なる宮に達した

9〔8〕b[1]　むなしい偶像に心を寄せる者は、その忠誠を捨てる

10〔9〕a[1]しかし私は感謝の声をあげて、あなたに犠牲をささげ、私の誓いを果たそう。救いは主にある。

ヨナの詩は全体的に交差並行しているように見える。三〔二〕節と十〔九〕節が全体の詩を包んでいてインクルジオともなっている。中心は六〔五〕節七〔六〕節にある。五〔四〕節と八〔七〕節が「聖なる宮」の繰り返しによってバランスをとっている。

マゴネットはヨナ書一章も九節十節のヨナによる宣言を中心として四節から十六節までの水夫たちの祈り、言葉、恐れなどが交差並行していると述べる。[31] この同じ並行法的特徴が一章二章にあるということは顕著なことであり、一章二章の関連性、連続性、劇的効果性にとって大事なことであり、同じ著者による執筆を考える上で重要な要素となっていると言えよう。

C　文体的特徴

ヨナ書二章には散文と詩文が織り交ざり、特有の文体的特徴がある。全体として文学的技巧そして言葉の慎重な選択が目立つと言えよう。

一、散文の文体

ヨナ書二章の一〔一・十七〕節、三〔二〕節そして十一〔十〕節にも文体的特色がある。散文の文学的技巧は詩文の文学的技巧と類似しているように思われる。

(1)語呂合わせ。前述のように一〔一・十七〕節の דג גדול。דג（gādôl）は גד（dāg）とdとgの音を共有

して、子音の語呂合わせをしている。DGGD。

(2)繰り返し。בדגה מצולה（一〔一・十七〕節、魚の腹の中に）とבדגה מבטן（二〔一〕節、魚の腹の中から）が繰り返され、前置詞（מ と ב）が微妙に変化し、魚が男性形から女性形に変化している。十一〔十〕節に魚が男性形となって再び登場する。ויקיאהו（三）という語が二回繰り返されている。三〔二〕節のはじめにある ויאמר（言った）と十一〔十〕節のはじめの ויאמר（言った）が繰り返されている。

(3)インクルジオ。三〔二〕節のはじめの ויאמר（言った）と十一〔十〕節の ויאמר（言った）の間にヨナの詩が来るというインクルジオの工夫がなされている。

(4)交差並行（キアスムス）。一〔一・十七〕節と二〔一〕節と十一〔十〕節にיונה（主）とיונה（ヨナ）とדג（דגה）（魚）が繰り返し登場してそれぞれの役割をなす。一〔一・十七〕節は主のみわざ、魚は道具である。ここにA—B—Aの交差並行（キアスムス）が見られる。魚も男性形(A)—女性形(B)—男性形(A)と交差並行している。

(5)散文から詩へ、詩から散文への移行の文学的巧みさ。まず散文から詩への移行について、一〔一・十七〕節のבמעי הדג（魚の腹の中で）と二〔一〕節のבמעי הדגה（魚の腹から）の繰り返しは、三〔二〕節の詩の中のמבטן שאול（よみの腹から）に呼応して、ヨナの魚の中での滞在の時とヨナの詩の作詩とに同時性を持たせている。又、二〔一〕節のויתפלל-אל יהוה אלהיו（ヨナは主に祈った）とヨナが主に祈ったことに言及したことは詩への導入となっている。そうでなければ、三〔二〕節からの詩は突然何の導入もなく、押し入ることになるからである。また二〔一〕節と三〔二〕節は意味の上から同義的並行をなしているので、この点でも工夫がなされていると言えよう。次に詩から散文への移行について、詩は、ויצו（十〔九〕節、主に）で終っているが、十一〔十〕節の散文は、ויאמר（主は言った〔命じた〕）とヨナの主への叫びに主が答えて行動

していることを素早く適切に描写している。このように詩から散文への移行がスムーズに行なわれているところに文学的技巧がすぐれていることを見る。

二、詩文の文体

(1)言葉の選択　ヨナは一つ一つの言葉を音声学的に選択する上で非常に注意深い。言葉の選択にまで文学的、音声学的配慮をしている。作者は連続の単語の語頭と語尾の子音を同じか類似かにしようと努力している。

(イ)頭韻。① sh-sh-sh（שוֹבְבִים שָׁוְא חַסְדָּם עָזָבוּ 3c-d）。② ʻā-ʻā（עָלַי עָבְרוּ 4c）。③ ᵃ-a（אֶל־אֶרֶץ 5a,c）。④ e-ē-e（מִצֹּלְלוֹת אֶל־לֵב יַמִּים 8b,c,d）。⑤ a-a-a（אֶל־הֵיכַל קָדְשֶׁךָ אֶחֱזֶה 10a,c）。

(ロ)押韻。① î-î-î-î-î（יְהוָה־לִי עֹזְרִי וּמְשִׂגָּבִי 3）。② î-î-î（יְהוָה הוֹשִׁיעָה מִלְּכוֹ 4a-b）。③ ê kā-ê kā（בְּקוֹל־תּוֹדָה אֶזְבְּחָה־לָּךְ 5b,d）。④ tî-tî（אֲשֶׁר־חַסְדָּם יַעֲזֹבוּ 5a）。⑤ kā-kā（אֲשֶׁר־נָדַרְתִּי אֲשַׁלֵּמָה 6a,b）。⑥ nî-nî（אֲשֶׁר־נָדַרְתִּי אֲשַׁלֵּמָה 6a,c）。⑦ sh-sh-sh（מִשָּׁם־שָׁמַעְתִּי אֶת־שַׁוְעָתִי 6a,c）。⑧ m-m（הַרִים מַבּוּל יְסֹבְבוּנִי 6a,b）。⑨ m-m（מִמְּעֵי־שְׁאוֹל שִׁוַּעְתִּי 7a,c）。⑩ î-î-î（אֶל־הֵיכַל קָדְשֶׁךָ אֶחֱזֶה 8a,b,c）。⑪ kā-kā（אֶל־אֶרֶץ 8c,d）。⑫ m-m（מִמְּעֵי־שְׁאוֹל שִׁוַּעְתִּי 9a,b）。⑬ ā-ā-ā-ā（אֲשֶׁר־חַסְדָּם יַעֲזֹבוּ־לָמוֹ אֶת־רַחֲמָיו יִרְחָמוּן 10a-b-c-d）。

(2)擬声　六〔五〕節の מִמְּעֵי־שְׁאוֹל の מִמְּעֵי と הַרִים מַבּוּל の הַרִים という言葉は、繰り返しの語根（ff、bb）を用いて、擬声語となっている。擬声的な言葉を聞くと、音の効果を鑑賞することができ、劇的効果をあげている。[32]

(3)反対語　七〔六〕節の反対語は יָרַד（くだる）と נִסְעָה（引き上げる）である。七〔六〕節の יְסוֹדֵי הָרִים（基に）は前節の יָרַדְתִּי（私の頭に）の反対語である。九〔八〕節も מַרְגִּיעִים（心を寄せる）は עֲזָבוּ（捨てる）という対照的な動詞が使われている。

(4)対語　三〔二〕節で מִמְּעֵי と מִשָּׁם は対をなしている。四〔三〕節で מְצוּלָה（海）と נְהָרוֹת（潮の流れ）が対を

なしている。六〔五〕節では מים（水）と תהום（深淵）が対をなしている。תהום は מים、נהר とも対をなす語である。

⑸比喩的表現　四〔三〕節の מצולה（海）や נהר（潮の流れ）、תהום（深淵）は、人間の魂を脅かす最も極端な苦しみの象徴表現である。תהום は原始の海の比喩的表現であり、מים も慣用的比喩的表現である。七〔六〕節の הרי גבעות（山々の基）、בריחי הארץ（地のかんぬき）は死に関する比喩的表現である。ותעל מן שחת חיי（あなたは私のいのちを穴から引き上げられた）は死からの救いを描写する比喩的表現である。

D　「ヨナの詩」のヨナ書全体構造との関係

詩とはその「意味とともにその音声と示唆的な力のために選択され、濃縮された言語の使用と韻律の構成、自然界のリズミカルな音、押韻と陰喩のような文学的技巧の使用が特徴となる、経験についての生き生きした想像的感覚を伝えることを目的とした作品」[33]と定義できるかもしれない。この文学傑作の韻律に照らして、ヨナ書は内的に二つの主要な側面に沿って構成された五つの部分（①一・一―八、②一・十―十六、③二・二―十、④三・三―四・二、⑤四・一―十一）において韻律の言語で書かれている物語詩と描写することが出来る。支配的側面（①一・十―十六、③二・二―十、⑤四・一―十一）は垂直的で、ヨナの逃亡、ヨナの祈り、ヨナの宣教ならびに主のヨナとの問答である。それらにおいて主の恵みに焦点があてられている。もう一つの側面は二つ（②一・十―十六、④三・三―四・二）が、外の人たちに焦点を当てる。ヨナの味方（水夫たち）と敵（ニネベの人たち）は主を恐れることによって、主を礼拝するために召され、彼らの悪の道から戻る。

この「ヨナの詩」は、こうしてヨナ書全体の構造的デザインの内的部分、絶対必要な部分であって、しばしば主張されるような二次的な挿入ではないのである。ヨナの物語のまさにその点で、ヨナは彼の地獄の深みへ最終的に降下するところで、ヨナの言語は叙情的な高みへと飛翔（ひしょう）するのである。そしてひとたび大きな魚がヨナをニネベの方へ方向転換させるや否や、詩人の言語は物語詩のレベルに戻るのである。[34]

Ⅴ　ヨナ書二章の思想の流れ

A　一〔一・十七〕―二〔一〕節。ヨナはアッシリヤの首都ニネベに向かって預言するべく主から召命を受けた。しかし異邦人の都に向かって預言することは勿論その使命にかかわることさえも望まないヨナは、この召しに逆らってタルシシュに逃げようとする。ここでヨナは、タルシシュに逃れ切ることができず、大海に投げ込まれるという挫折を経験する。

B　三〔二〕―十〔九〕節。第二章は海に投げ入れられたヨナがどのようにして海のなかで神の助けを得たか、またその挫折の時の祈りであり、またどのように使命に復帰したかを示す。ヨナの祈りは三つに区分される。

(1)三〔二〕―五〔四〕節。ヨナは苦悩の叫びをあげ、神に答えられた。ヨナは「よみの腹から」救いを叫び求め、神はヨナを大きな魚の腹に移すことで答えられた。しかし、当面の救済にもかかわらず、ヨナは依然として神の前から、即ち、イスラエルにおいて神の臨在を象徴する神の聖なる宮から断ち切られていたのである（四〔三〕節）。それゆえヨナは救われてはいても、さらなる救いのわざを待ち望むのである。

(2)六〔五〕―八〔七〕節。第二の部分は、第一の部分の内容を異なる言葉で繰り返している。ヨナの運命はほとんど決定されていた。海の水がヨナの頭上を閉ざし、ヨナは山々の根元に沈んだ。時には海草がヨナの頭にからみついた（六〔五〕節）。ヨナは下降しつつあった。地のかんぬきはヨナを閉じ込めていた。しかし最後の瞬間に、神はヨナを引き上げ、ヨナはもう一度生きる機会を与えられた。ヨナは聖なる宮から遠く隔たっているにもかかわらず、神の聖なる宮に祈りが届いたことを確信する。

(3)九〔八〕―十〔九〕節。この祈りは偶像崇拝のむなしさに関する反省と神への誓いの成就の言明、神の救いの力の宣言で終わる。ヨナの祈りは偶像の神々への拒絶と、真の神に対する信仰告白とを含んでいる。「私の誓いを果たそう」の「誓い」の内容は語られていない。あるいはヨナに委託されたニネベに対する宣教の使命を果たすという誓いであろうか。

C　十一〔十〕節。ヨナの祈りと感謝に応えて、神は大きな魚にヨナを陸地に吐き出すように命じられる。こうして、ヨナの心の内奥における根本的な変換が生じたことに応じて、神はヨナを使命の生活に戻される。

Ⅵ　ヨナ書二章の神学的課題

A　ヨナの祈りは、ヨナ書全体の使信と象徴的意味を発展させる。ヨナの生の転換点は、神の召しに逆らって、下へ、下へとくだって行った、深みの極みにおいて生じた。最初に神の召命に「否」と答えてから、ヨナはヨッパに下り、船の中に降り、船長に降り、ついには海の深みに降り下った。海の深み、深淵への最後の下降は、もしヨナが水夫たちによって海に投げ込まれる前に心を変えていなければ、彼の最期となって

いたであろう。ヨナは深みから悔い改めの祈りをささげた。ヨナの祈りは、哀切とユーモアの二つの要素がその特徴となっている。ヨナは最終的に海の深みの中で魂の高みに達したのである。ヨナはまたよみにまでおられる神、神の遍在を体験した。「私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。」（詩篇一三九・七―八）

B　ヨナ書二章は神の愛を強調する。ヨナ書二章は神のいつくしみときびしさを示している。ヨナが生の命令を拒んで使命からはずれたところに逃げても、主はヨナを追っていかれる。主は魚にヨナを呑み込ませることを命ずると共に、吐き出すことを命じる。魚に対する支配と選んだ預言者を再び使命に立たせようとする御意志をもっておられる。「神は高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる」（ヤコブ四・六）方であることを学ぶ。主はあわれみの神であり、罰するよりも赦しを願う愛の神である。

C　ヨナ書二章は新約聖書へ橋渡しをする。ヨナは、魚の腹の中で三日三晩を過ごした後、ついに陸地に吐き出された。後代において、これは「ヨナのしるし」（マタイ十六・四、ルカ十一・二九）として引き合いに出されることになった。ヨナが魚の腹の中で三日三晩過ごしたように、人の子も墓の中で三日三晩過ごすであろう（マタイ十二・三九―四〇）。また「キリストは……死なれたこと、また葬られたこと、また聖書に従って三日目によみがえられたこと」（コリントI十五・三―四）とある通りである。[35] 換言すれば、ヨナの経験はイエス・キリストの死と墓からの復活を象徴することになったのである。だがその象徴的意味は、さらに広がる可能性を持っている。死のただ中にいる信仰者にとってキリストの死と復活は、罪のために死に、キリストにおいて新しい生命を受けることができるのだという意義をもっている。[36]

Ⅶ　結語

我々はヨナ書二章の文学形態と文学的特色を見てきた。ヨナの祈りの詩は、ヨナが神から与えられた預言者の召命と使命を放棄した結果の逃亡のさなかで自らにふりかかった絶体絶命の危機・苦境の中で、ヨナが神に向かってなした叫び、祈りである。ヨナは自分が深淵の中で経験したことを深い思想と感情、そして悔い改めと信仰を見事に表現している。この詩全体が美しい均衡を保ち、キーナー調（3・2型）の韻律の主旋律、見事な多種の詩的並行法の駆使、用語の選択、文学表現、擬声、反対語、対語などによって緻密に構成されたものであり、散文から詩文への移行、詩文から散文への移行にも色々な文学的技巧をほどこし、スムーズな移行となっている。さらに散文の部分も物語詩の特色を持ち、韻律をはじめ詩的要素など文学的技巧をもって作られていることを発見した。

神の召しを受け使命を拒否してから神に立ち返る預言者の内的葛藤、懊悩をこれほどまでにあらわにしたものはない。海の中で、魚の腹の中で、翻弄されながらも、神のみ守りと救助を悟ったヨナは神への悔い改めと再度の信仰告白をしている。ヨナ書二章と特にヨナの詩は後代の二次的な挿入ではなく、ヨナ書全体の文学構造の中で絶対必要な部分であることを示しているように見える。

〈注〉

①アルトゥール・ヴァイザー『旧約聖書緒論』小野寺幸也、時田光彦訳　日本ルーテル神学大学　一九七〇年　二九九―三〇一頁。

②J. D. Smart, "Jonah," *Ezekiel Daniel Twelve Prophets*, (*The Interpreter's Bible* New York: Abingdon Press, 1956) p. 886.

③Jack M. Sasson,*Jonah* (*The Anchor Bible* New York: Doubleday 1990) p. 161.

④Duane L. Christensen, “Narrative Poetics and the Interpretation of the Book of Jonah,” *Journal For the Study of the Old Testament Supplement Series* 40 ed. by Elaine R. Follis (Sheffield: JSOT Press 1987) p. 30.

⑤J. M. Sasson, op. cit., p. 874.

⑥Ibid., p. 147.

⑦*John Day, God’s Conflict with the Dragon and the Sea — Echoes of a Canaanite Myth in the Old Testament* (Cambridge University Press, 1985), p. 111.

⑧J. M. Sasson, op. cit., p. 148.

⑨Douglas Stuart, *Hosea-Jonah* (*Word Biblical Commentary* 31; Waco, Texas: Word Books, 1987) p. 479.

⑩G. M. Landes, “The Three Days and Three Nights’ Motif in Jonah 2: 1,” *Journal of Biblical Literature* 86 [1967] pp. 446–50.

⑪J. Magonet, *Form and Meaning — Studies in the Book of Jonah* (Sheffield: Almond, 1983), p. 127 n. s.

⑫J. M. Sasson, op. cit., p. 154.

⑬J・F・ソーヤー『旧約の預言と預言者』（オックスフォード聖書概説シリーズ）　宍戸基男訳　ヨルダン社　一九九四年　一九九頁。

⑭G. M. Landes, “The Kerygma of the Book of Jonah,” *Interpretation* 21: 3–31 (1967).

⑮B・W・アンダーソン『深き淵より—現代に語りかける詩篇—』中村健三訳　新教出版社　一九八九年　一三〇頁。

⑯D. Stuart, op. cit., p. 473.

⑰J. M. Sasson, op. cit., p. 171.

⑱江口武憲「ヨナ書」『小預言書(1)ホセア書—ヨナ書』(信徒のための聖書講解18　聖文舎　一九八七年　二八八頁。

⑲D. Stuart, op. cit., p. 476.

⑳Cyrus H. Gordon, *Ugaritic Textbook* (Rome: Pontificum Institucum Biblicum, 1965) 68: 13, 20.

㉑J. D. Smart, op. cit., p. 886.

㉒Brown, F., Driver, S. R. & Briggs, C. A., A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament (Oxford: Clarendon, 1907) p. 686.

㉓関田寛雄「ヨナ書二章」『十二小預言書　説教者のための聖書講解』日本基督教団出版局　一九九二年　二五一頁。

㉔J. M. Sasson, op. cit., p. 182.

㉕Ibid., p. 185.

㉖D. Stuart, op. cit., p. 477.

㉗David W. Baker and Bruce Watke, *Obadiah, Jonah Micah* (Tyndale Old Testament Commentary Leicester, England: Inter-Varsity Press, 1988) p. 117.

㉘Hinckley G. Mitchell, John Merlin Pows Smith, Julius A Bewer: *Haggai, Zechariah Malachi and Jonah* (The International Critical Commentary Edinburgh: T. & T. Clark, 1912) pp. 43–44.

㉙Wilfred G. E. Watson, *Classical Hebrew Poetry A Guide to its Techniques* (Journal for the Study *of the* Old Testament Series 26 Sheffield: JSOT press, 1984) p. 182.

㉚J. Magonet, op. cit., pp. 44–50.

㉛Ibid., p. 57.

㉜Wilfred G. E. Watson, op. cit., p. 236.

㉝*The American Heritage Dictionary of the English Language* (New York: Houghton Mifflin, 1976), p. 1011.

㉞Duane L. Christensen, op. cit., p. 45.

㉟Kurt Aland ed. *The Greek New Testament* (London: United Bible Societies 1966), p. 917.

㊱P・C・クレイギ『十二預言書Ⅰ』山森みか訳　新教出版社　一九八九年　三七三頁。

（旧約学・講師）